ラテンアメリカの『水の精』についての世間話

三原幸久

ラテンアメリカという広大な土地における「水の精」にまつわる伝承を考える時、伝承者の所属する人種集団によって、クリオージョ criollo（米大陸生まれの白人）とメスティソ mestizo[1]（白人と原住民の混血）のグループの伝承と、インディオ indio またはインディヘナ indígena と呼ばれる原住民の伝承に大きく二分しなければならない。

後者の伝承は、それぞれ種族独自のものがあり、それらを系統的に分類するのも興味あるテーマであるが、本稿では一応除外することにする。前者は、その基底に多かれ少なかれ、スペイン・ポルトガルの基層文化がある以上、ラテンアメリカ全体を単一の文化単位として見ることもある程度可能であるので、メキシコ[2]とブラジルを中心として、「水の精」の伝承を分類し、それが他の地域にどのように変化しながら伝播したかという点と、その伝承の持つ社会的機能を探ってみることにする。

ラテンアメリカの「水の精」は、その現われ方と名称が様々であり、錯綜しているが、結論的に言うと次の三つの形に大きく分類することができる。

(1)「ジョローナ（泣き女）」系伝承
(2)「シグアナバ（誘い魔女）」系伝承
(3)「マンイダグア（水の母）」系伝承

一、ジョローナ llorona 系伝承

そのスペイン語の意味の通り、「泣き叫ぶ女[3]」というのが最大の特徴であり、夜間に（稀に昼間に）川辺、池沼等の水辺に（稀には森や街路に）現われるものの、けである。その点で、今ではその性格が時にはうすれていることがあっても、かつては水の精であったことは確実である。次にいくつかのジョローナの伝承を引用してみよう。

〔例話a〕ジョローナは最初の子供が生まれた時、育てようとしなかった美しい女である。女は子供を流れの中に捨て、次いで生まれて来た三人の子供も次ぎ次ぎと捨てた。死後、罪の償いとして、捨てた子供を集めるように命じられたが見つからない。そこで町外れや、山の川の流れの近くをさまよい歩く。その髪は長く、白い衣服も土地に届くほど長い。多くの人が「私の子供」という叫び声を

聞いている。

〔例話b〕話者の父親とその友人はハイウェイを歩いている時、一人の女性に出会った。男達は女のあとを追い、口笛を吹いたが、女は振り向きもしなかった。女はある農場に着いて、そこの橋を渡ろうとした。そこで女が振り向くと、女の首はラバの首だった。数秒後、女の泣き叫ぶ声が聞こえた。男達は女を追うのをやめた。

〔例話c〕二人の仲間は、ある夜ハマパからベラクルスに向かって歩いていた。エル・エスパルタールの近くで一人の女が二人の方に向かって来るのが見えた。二人は急いで女に近づき、女に話しかけた。女は三度叫び声をあげ、沼の水の上を走って逃げて行った。遠くの方で女は再び叫び声をあげた。その女は別の人の前にも現われたと言われる。ジョローナは人を驚かすが害は与えない。

〔例話d〕エスペランサ・ロドリゲスは朝方一〜二時頃にジョローナの叫び声を聞いた。ジョローナは三ブロックほど離れた所にいて女が歌うような声をあげた。子供を求めて叫び声をあげ、空中をとんで、町はずれに行き、再び叫んだ。ジョローナは川や井戸に子供を投げこんだ女で、現実に存在するが、目には見えない。

メキシコや旧メキシコ領の米国の諸州（カリフォルニア、コロラド、ニューメキシコ、テキサス）の多くの伝承に現われたジョローナの姿はおおよそ次の通りである。

服装は白衣、黒衣、経かたびらを着ているというのが最も多い。ただ泣き声が聞こえるだけというのもあり、火の玉として現われる例もある。稀に体は女で動物の顔を持つと語る人もあるが、これは別の怪異の話との混同であろう。ジョローナのこの世にさまよう原因としては、(a)子供（しばしば婚外子）を殺した後、自分が死んであの世へ行けずさまよう。(b)いなくなった子供を探しているうち気が狂って。(c)水に溺れた子供を探して。(d)メキシコのアステカ王国を征服したエルナン・コルテスの通訳兼愛人となってコルテスの子を生んだ、マリンチェ Malinche が祖国を売った罰としてこの世をさまよう、等の諸説がある。

この最後の(d)の考え方は、メキシコの民衆の民族主義的考え方として興味があるが、この解釈は今に始まったものではなく、メキシコ独立後、最初のスペイン使節カルデロン・デ・ラ・バルカの妻ファニーが一八三九年十二月三十一日の日記に、旧アステカの都の跡を訪ねたあと、「今もここの洞窟や水槽や森にはコルテスの愛人ドニャ・マリーナ（マリンチェのこと）の亡霊が現われるとのことです」と記しているのによれば一九世紀始めにはすでに人びとがマリンチェをジョローナと関係づけていたようである。

ジョローナがその姿を見た人、声を聞いた人にどのような害を与えるかについても、(a)自分の子供に会ったかと尋ねる。(b)あとをつけて来る人をおどす。(c)ふり返って見ると、首がねじれる。(d)人をひきつけておいて、人気のない所で殺す。等があるが、(d)については後述するようにシグアナバとの混同と考えられ、この両伝承のはっきり分離していない地方のあることを示している。

いずれにせよ、ジョローナの伝承はあまりにも広く深くメキシコに知れ渡っているので、おとなが子供をおどすのにもしばしば「ジョローナが来るよ」と言うほどである。

メキシコの隣国グアテマラでも、ジョローナの伝承は一般的であ

る。次にグアテマラの伝承をいくつかあげてみよう。

〔例話e〕ラ・パロキア近辺の少年達が何人か、聖木曜日にアンティグアへ行こうと歩いていた。ラ・カンデラリアをすぎて、アルボレス街にさしかかった時、絶望したような女性の長く苦しげな叫び声が聞こえた。その声はとても恐ろしかったので、全身に鳥肌がたった。「きっと何かの獣だろう」と自分で慰めていた。しかし、叫び声はだんだん近づき、ついには少年たちのまん前で聞こえた。そして叫び声はさらに近づくと、やがて遠ざかって行った。少年達は驚きのあまりコネホ小路にあったロドリゴ・アストゥリアスの牧場の牛小屋に入りこみ、次の日の朝まで動かずにじっとしていた。もちろんアンティグアへは行けなかった。

〔例話f〕サン・セバスチャン区の街路で起こった。わしは、友人のグループといっしょに、その中の一人のやつの恋人の家の前でセレナーデを演奏しての帰りだった。サン・セバスチャンの古い貯水池の所でジョローナの恐しい叫び声を聞いた。(わしは決して嘘は言っとらんぞ)そして公園のポプラ並木の間に女の黒い影が動いた。わしはジョローナの声を聞いたり、姿を見た者は即座に死ぬと人が言っているのを思い出したので、驚いて仲間の一人の家へ走り、ソレダー小路にあるその家に隠れた。入りこんだとたんに、再び叫び声が聞こえて、わしらはふるえ上がってしまった。

人びとの言うところによると、黒衣を着た女性で、貯水池、川など、水のある所に現われ、絶望的な声で「ファン・デ・ラ・クルス(十字架の聖ヨハネ)」と叫びながら、衣服のすそをなびかせて全速力で通りすぎる。しかし、このものは視覚的というよりも聴覚的で、身体的特徴がわからない場合も多い。その声を聞いた者はどんな勇者でも、無神論者でも、血の凍るような恐怖を感じると言われる。あまりの恐ろしさに足がすくんでしまうが、むりにでも走って逃げねばならず、三度、同じ場所で叫び声を聞くと命を落としてしまうとも言われる。その呪力を無力化するためには、(a)聖牌(メダジャ)、十字架その他の何か金属製のものを噛むか、(b)平常祈っている聖者に祈り、空中に十字を切るか、(c)女性の手を握りしめるとよいと言われる。(c)の理由は、ジョローナが捜し求めているのは男の子なので、女性には害を与えないと言われているが、後述するように筆者は別の理由を考えている。ここでもジョローナの迷う原因はやはり、男と逃げるためわが子を溺れさせたと言っている。

同じような伝承はニカラグアにもあり、やはりジョローナと呼ばれている。

コスタリカでも、髪を振り乱し、川の岸を夜に歩き回り、悲しげな泣き声をあげるというジョローナの要素はほとんど変化がない。自分の過失を隠すために子供を川に投げこんだと語る人と、マリンチェの魂だと説明する人がある。

パナマでもジョローナと呼ばれるが、田舎ではテペサ tepesa、トゥリ・ビエハ tuli vieja と呼ばれる方が多い。

ベネズエラでもジョローナは、子供を殺した女の霊であり、泣いているジョローナは人が通るのを見るとさらに泣き声を高くする。これに出会うと、顔をおおって「アベ・マリアの祈り」を祈るとよいと言われるが、ララ州では、四旬節に現われ、遠ざけるためにはののしる方がよく、祈るとかえって近よるとも言われる。ベネ

ズエラでは、この種の妖精は時にベリオナ berriona、グリトーナ griiona（叫ぶ女）、ネチョーサ nechosa と叫ばれることもある。

コロンビアでは、一般的にはジョローナと呼ばれるが、特にパスト地方ではトゥルママ turumama（ケチュア語で「泥の母」）とも呼ばれ、悪魔のように醜いしわだらけの老婆で、足の代わりにラバの蹄を持ち、乳房は背中にかつげるほど長いと言われ、かなりその姿が醜怪になっている。夜に川のあたりを泣きながらさまよい、「どこにいるんだ、お前は！」と叫ぶ。結婚せずに子供を産み、恥を隠すために、川に子供を投げこんだので、永久にさまよわなければならない女性であるとされる。

アルゼンチンでは、ジョローナは白い衣服を身につけた女で、助けを求めながらさまよい歩き、もし親切な人が助けようとすると、その機会を利用して着ている物をすべて、下着までも奪ってしまうと言われ、もう水との関係は薄れてしまっている。

チリのサンチャゴでは、悲しげに泣き叫ぶ、子供を病気で失った哀れな母親の亡霊だと説かれ、ここでも水との関係はもう見られない。筆者はサンチャゴ市プダウエル地区の伝承調査でジョローナの話を数多く聞いたが、伝説の集成として有名な、ビクーニャ・シフエンテスの『神話と迷信』[4]に全くジョローナの伝承がないので、比較的新しく入った伝承かも知れない。

二、シグアナバ ciguanaba 系伝承

シグアナバと言うのはメキシコの一部での呼び名であり、同様の性質の水辺の妖怪に出会った世間話は全ラテンアメリカで話されるが、その妖怪の名称は地方によってさまざまで、ジョローナのような統一性はない。普通、シグアナバは透き通るような白衣を着て、髪の毛は黒くて長く、顔にかかっていて、顔がよく見えないとも言われる。毎夜、水辺に現われて水浴びをする。透けて見えるその美しい肉体に男性は魅惑され、女のあとをつけると、やがて崖につれて行かれて深い谷間に落とされてしまう（あるいは、他の方法で殺される）と言われる。

メキシコのチナントラ地方では、シグアナバはマトラシワトル matlacihuatl（ナワトル語「網をはる女」の意）と呼ばれ、赤毛で葉巻を吸っている女の姿として水辺に現われる。しかし、ここでは男女双方のマトラシワトルがあり、男のそれは女を誘惑し、女のそれは男を誘惑する。

メキシコのユカタン半島地方では、この種の精霊はシュタバイ xtabai と呼ばれる。次に原住民教育局の集めた話を引用しよう。

〔例話 g〕うちの父さんはシュタバイに切りつけた話をしてくれた。酒に酔って旅をしていた時にシュタバイに出会ったのだそうだ。髪の長いとてもきれいな女であった。女は父さんをとらえた。「さて、お前はわしにどうしてほしいんだ」と父さんはシュタバイに尋ねた。しかし女は見ているだけで、口もきかねば、身動きもしなかった。父さんは自分独りでしゃべっているのに気づかなかった。そこでいつも身につけている短刀で、すきを見て女を突き刺した。すると女は手を離したので、父さんは逃げ帰った。次の日の夜明けに、足跡をたどって行って見ると、短刀はサボテンに突き刺さっていた。

このように、マヤの人気のない水辺の道でセイバ（カポック）の木の後ろによく現われ、その美しさと肉体的魅力で旅人を引きつけ、道に迷わせたり、死に至らしめたりするが、叫び声も唸り声もあげない。

グアテマラにおけるシグアナバの伝承はメキシコ以上によく流布している。次にその世間話を二例ほど引用しよう。

〔例話h〕グアテマラ市オホ・デ・アグア区の出来事であるが、一人の男がピラ・セカの小路を歩いていると、サン・フランシスコ貯水池で髪の毛が長くて美しく、白い衣を着た女が水浴びをしていた。男は持っていた花を投げて、「おーい、ベッピンさん、わしが水浴びをさせてやろうか」と声をかけた。すると、女は水浴びをやめ、顔をこちらに見せないまま、男をしきりに誘った。男は喜んであとをついて行った。いくつもの通りを歩いたが、女に行きつくことはできなかった。そしてやがて墓地へ着いたが気はつかなかった。中に入ると、女は振り向いた。見ると、顔の代わりに馬の顔がついていた。女は男にとびかかり、男をつれ去り、断崖へ落としこもうとした。男は抵抗し、もがいているうちに首に聖牌（メダジャ）をかけているのを思い出し、それを口にくわえると、噛んで祈りを捧げた。すると女は一声叫んで、深い谷に飛びこんだ。男の腕と顔にはひっかき傷が残っていたが、それはどうしても治らず、死ぬまでそのままであった。その女はシグアナバであった。

〔例話i〕旧教区に若者がいて、向こう岸で働いていたのでラス・バカス橋を毎晩渡らねばならなかった。ほとんど毎夜、川で一人の女が水浴びしているのが見られた。女はいつも顔を向けずに若者に声をかけたが、若者は取り合わなかった。しかし、ある夜、好奇心から川に下りて、女を近くから見た。その体は透明の下着を通して輝いているように美しかった。髪は長くて黒かった。女は川に向かって歩き出した。男は女のあとを追った。しかしどんなに歩いても女に追いつかなかった。男は後を追うのをやめようと思ったが、その魅力に引きつれられたように足を動かしていた。突然谷間から吹く冷たい風を感じて足を止めたが、勇気を出して一歩近づき、手を伸ばすと女の髪の毛を握った。そして強く引っぱると、大きい叫び声をあげて、女は崖から落ちていった。そしてひどい眠気に突然おそわれて倒れた。次の日の朝六時頃、目を覚ますと、手にはそのあたりには生えていない乾いた苔を握っていた。ほんのもう一メートルほどで、深い崖であった。シグアナバに命をとられるところをこうして危く助かった。

また、グアテマラのケクチ族居住地域の伝承によれば、この「川の精」はシマナグア cimanagua またはシグアナバと呼ばれる。次のような話がある。

〔例話j〕二十三年程以前に大酒飲みの男が妻に逃げられ、あちこち探し回るが、みんなは妻の居所を教えなかった。男はますます酒を飲むようになった。真夜中に家に帰ると、バナナの木の根元に妻が髪の毛をばらばらにしてくしけずっていた。水浴びをした後のように思えた。男は近づき、もう酒は飲まないからもどってくれと言うと、女は「私についていらっしゃい」と言うので、あとをつけて行くと、チ・クアロンという沼に行き、女は水の中に入ったので、男もついて入った。すると、女は「私があなたの奥さんだと思いま

すか。私の手を見てごらん」と言うので、見ると馬の足で、目も馬の目のように光っているので、男は驚いて動けなくなってしまった。次の日、家族が男を探し、沼の水中で死んだようになっている男を見つけてつれもどった。家で衣類を替えて温めてやると、感覚がもどり、あった出来事を話したが、その後病気になって死んだと言うことだ。

コスタリカではセグア cegua、またはセウア cehua（ナワトル語で「女」の意味）と呼ばれ、馬頭の女、または黒衣の女で、水辺にいて、夜遊びをする男の前に現われると言われる。

サルバドルではシグワナバと呼ばれ、ホンジュラスではシグワ cigua、ビエハ vieja（「老女」）、スシア sucia（「汚い女」）と呼ばれ、類似の伝承が語られている。

ベネズエラではディエントーナ dientona（「歯をむき出す女」）と呼ばれ、白衣を着た美女の妖怪で、川の橋のたもとで男性の通りかかるのを待って散歩に誘い、黄金の歯をむき出し、長い歯をX状に交叉し、のどから炎を出し、硫黄のにおいを発すると言われる。この同じ妖怪が、別の地方ではサヨーナ sayona と呼ばれており、これを追い払うには服を裏返しに着ればよいと言われる。

ブラジルでは、この種の水の妖精は一般にイアラ iara, eiara, oiara と呼ばれ、男の姿にも女の姿にもなって異性を誘惑する。川や湖の表面をじっと見つめていると、そこにイアラを見ることがよくあると言われる。イアラは腕を拡げて犠牲者を招き、引きつけて水底へ引きこみ、そこで結婚式をあげた後、相手を殺すと言われる。イアラの語源は黒人系の言語にあると思われるが同じものがバイア州では、イエマンジャー yê-manjá とヨルバ語で呼ばれている。

アルゼンチンではビウダ viuda と呼ばれて、夜、人気のない所でしばしば現われるが、ジョローナの場合と同じように、水との関係がかなり薄れてしまっている。白衣を着たり、シーツをかぶったりして、竹馬に乗って現われると言われるが、カタマルカ州の伝承では、やせた背の高い女で、黒衣を着てはだしで現われ、口から火を吐いているという話もある。夜遊びをする男を誘惑するが、男が馬に乗っていると、馬の尻にとび乗って来て、男を抱きしめて殺すと言われる。北部のサンチャゴ・デル・エステロ州では、人里離れた場所にも町中にも現われるやせた背の高い女で、人待ち顔に道に立ち、その黒いコートはかすかに風にひるがえっており、男が通ると、ほほえんで話しかけ、男を誘い、襲うが、女が通ると知らぬ顔をして隠れると言われる。アルゼンチンではビウダの話はよく広まっていて、いたずらをする子供や、寝つかない子供をおどしつけるのにも使われる。

ボリビアでもビウダの伝承はよく知られているが、水との関係は薄くなっている。サンタ・クルス州およびコチャバンバ州で特に多く記録されているが、いずれも男を誘惑する女の死霊の一種だと考えられている。一九五六年コチャバンバで採集された伝承を次に引用しよう。

〔例話k〕夜遅くまで店を開いている一軒の店で男が酒を飲んでいた。通りは静かで、通行人もいなかった。「おかみ、誰かあんたを呼ぶ声が聞こえたよ」「何か御入用ですか」と女主人は尋ねた。「ベリタを一杯売って下さい」と女が言った。酔った男はその女がとて

も美人なのを見て、口説こうとして言った。「お一人ですか。おかみさん、ベリタを二杯上げて下さい」。女は二杯分のベリタを受けとって、男にあとをついて来るように目で合図を送った。この男は酒瓶をおいて、二人で腕を組んで、かわいい女の家へ行ってしまった。部屋には二つベッドがあり、長い間おしゃべりして、二杯のベリタが飲み干されようとする頃、女は「横におなりになっては」と意味有りげに言った。男は素直にベッドに入ったが、相手が仲々自分の隣に来ないので、待ちくたびれて眠ってしまった。次の朝、目がさめると、かたわらに墓があり、死体のそばで寝ていた。そこは地下墓地だった。女はビウダでこのほれっぽい男をからかったのである。

また、道の途中で若い美女に出会い、家までのつきそいを頼まれて、ついて行ってやると、お礼にオレンジをくれ、さらに誘惑されて一夜を共にするが、朝起きてみると、茨の生い茂った野原に寝ており、持っていたオレンジを見ると、牛糞だったという話も同じコチャバンバから報告されている。

チリでは、ビウダとは黒衣を着て、暗い夜に、馬で通る男の馬の尻にとびのり、男を抱きしめて殺す女の妖怪で、全土に分布している。これにも幾つかの変種(バリアント)があり、抱きしめて苦しめた後、とつぜん馬からとび降り、消え去るが、その後には白骨の詰まった袋が残っているという話（ラ・セレーナ）や、抱きしめて、男の耳元で埋めた宝のありかをささやくもの、実は、大金を埋めたまま死んだ女の亡霊だと説く話（サンチャゴ）、黒衣を着たはだしの背の高い女で、歩く時はペチコートのきしむ音を立て、話す時は口から炎を吐き、夜遊びをする若い男を後ろから抱きしめて締め殺すというもの（チロエ島）等がある。しかし、また時にビウダとは呼ばれないが、シグアナバに似た水の精の住む湖沼は南部に多くある。次にその一つの伝承を記そう。

〔例話1〕ニュブレ州のカト川近く、道からそれた所に、毎週木曜日の午後に金髪のとても美しい娘が現われ、きれいな声で歌った。何人かの男はその歌声に引きつけられて妖精がいる山へはいりこんだ。そして二度ともどって来なかった。男達に何が起こったのか誰も知らない。

以上のべたラテンアメリカ全域で、シグアナバ系伝承はジョローナ系伝承と名称の上で混同がある。シグアナバと呼ばれるべきものを人はしばしばジョローナで呼ぶのである。しかし、その逆、すなわち、ジョローナと呼ぶべきものを決してシグアナバとは呼ばない。この点で、「ジョローナ」がいかにラテンアメリカにおいて強い伝承力を持っているかが理解される。

三、ジョローナとシグアナバの起源と社会的機能

ジョローナとシグアナバの起源がスペインから由来したものか、それとも原住民起源のものかについては議論されて来たが、起源についての筆者の考えと、この両者の社会的機能について簡単に考えてみよう。

ジョローナの泣き声の科学的真実については、ある種の夜に泣く鳥ではないかと言われている。ジョローナの世間話に、泣き声ばか

りで、姿を見せないという内容が多いのもこのためであろう。しかし、そのような鳴き声の中に「水の精ジョローナ」を見るのは伝承であろう。その伝承がスペイン人渡来以前から存在したか否か、原住民起源かスペイン起源かが問題となる。結論的には、古代アステカのパンテオンの中には、河川の水の神チャルチウトリクエ Chalchiuhtlicue や水の神ナパテクゥトリ Napatecuitli 等多くの水の神があるが、これらの正式の水の神以外に民俗的に原住民の間に崇拝されていた「水の精」的な私的な神も存在したことは充分想像できる。

またシグアナバについても、男を惑わして滅ぼす美女の伝承は、旧世界のサイレンやローレライの伝説を引き合いに出すまでもなく、あまねく各民族に分布し、また現在の多くの原住民の種族にも類似の伝承があり、さらにシグアナバ系伝承の中にインディオの言語による命名があることから見ても、原住民の間にも何らかの恐ろしい水の怪異が存在したものと考えられる。

しかし、それらの原ジョローナや原シグアナバを現在のような形にしたのは、あくまでスペイン人渡来以後のクリオージョ・メスティソ文化だと考えられる。

ここで、ラテンアメリカ社会、特に初期植民地社会では、白人(クリオージョ・メスティソ)対原住民の対立の上に、男性対女性の対立が重なっている。男性＝父親＝白人はあらゆる支配者的要素、優秀さ、都会的なもの、土地から遊離した文明の象徴であるのに対し、女性＝母親＝原住民は、あらゆる従属的要素、劣悪さ、伝承的なもの、土地に密着した民俗の象徴である。この価値観の形成は、植民時代初期に米国の植民とは異なり、ほとんど女性の渡来がなく、原住民女性を妻にするというより、暴力的に性の相手にした歴史的事実を反映するものであろう。メキシコを始めとするラテンアメリカ社会の特徴であるマチスモ（ラテン的男性優位主義）や根強い事実上の一夫多妻婚、さらには土地に密着した労働の軽視等のラテンアメリカ人の精神的諸特徴の起源を、多くのメキシコの識者(5)はこの点に求めている。

それならば、ジョローナやシグアナバ伝承を形成したのは女性側であり、決して男性側にないことは、少数の例外を除き、これらの水の精が女性であり、特にシグアナバにおいて、男を攻撃しても女を攻撃しない点から見ても当然であろう。その意味で、ジョローナは「女性＝原住民」が男性にもて遊ばれて、子を産み、その子を捨てた女の哀れさを言い立てて、（マリンチェも子は捨てなかったが、栄光の中にも現地妻の悲哀の中に生涯を閉じ、この中に含まれる）「男性＝白人」から自からの身を守るため、消極的な防禦的機能を果たすために作った伝承であろう。またシグアナバは、「女性＝原住民」が「男性＝白人」を攻撃することによって、自からの身を守ろうとした積極的な防禦的機能を果たすために作った伝承であると考えられる。こう考えることによって、ジョローナやシグアナバが持つ多くの要素をうまく説明できるし、また、以前どちらも水の神であったことと合わせて、そのような類似した機能を持つため、その両者が常に混同される傾向があったのであろう。

この伝承は初期植民時代に先ずメキシコで作られ、以後、征服と植民が進むにつれて南へと伝わったが、メキシコから離れるにつれ

て、以前持っていた水の精としての性質を失って行ったのであろう。

四、マンイダグア mãe d'água 系伝承

マンイダグアはブラジルを中心に広まっている伝承で、ジョローナやシグアナバの伝承に比べて説話性が強く、ブラジルでは一種の昔話として多くの類話が採集されている。いずれもスペイン・アストゥリアス地方のシャナxana、ガリシアのシャxá、またはドナdona、ポルトガルのジャンスjãsの伝承と同様の、最後には破局に至る異類婚姻譚（水の精女房）的な物語が多い。最も代表的な説話のあらすじを次に記そう。

〔例話m〕貧しい男が、岩の所でいつも川岸に座っている髪を乱した女、マンイダグアに出会う。ある日、男は女を捕え、やっとのことで家へつれ帰って結婚をなっとくさせる。女は「水の下に住む者」を悪く言わないと約束させて結婚を承知する。男はすることすべてうまく運び、大金持ちになり、妻との間も仲が良い。しかし女は水へ帰りたく思って、家の中を少しもそうじしない。子供も母親の言うことを聞かず、召使いも妻の言うことに従わない。夫はたまりかねて、「水の下の者ときたら」とののしると、女は座っていた所から立ち上がる。すると、家の中に穴があき、女は歌を歌いながら穴の中へ入ると、家の中の財産はすべて穴の中に落ちて行き、家も穴の中に落ちて、男は以前の貧乏な状態にもどる。

その他の物語も全て、男が水の精と、水の精の悪口を言わないという約束の下に結婚するが、大きな富を得た後、妻にあき、ある日妻をののしると、妻は去り、富も消えてなくなるという筋である。

このマンイダグアについては、その内容より見て、原住民の伝承ではなく、全くガリシア・ポルトガル系の伝承に由来するものと考えるべきであろう。

【引用した類話の出典】

a. Stanley L. Robe: Mexican Tales and Legends from Veracruz, Berkeley, 1971, No. 45, pp. 108–109
b. ibidem. No. 48, pp. 112–113
c. ibidem. No. 50, p. 115
d. ibidem. No. 52, p. 119
e. Celso A. Lara F.: Leyendas y casos de la tradición oral de la ciudad de Guatemala, Guatemala, 1973, No. 2. 2. 2. 1, p. 121
f. ibidem. No. 2. 2. 2. 3, p. 121
g. Teodoro Canul Cimé: Cuentos mayas, tradición oral indígena, México D. F., 1982, p. 34
h. eと同じ、No. 2. 2. 1. 1, p. 117
i. ibidem. No. 2. 2. 1. 3 p. 118
j. Mary Shaw: Según nuestro antepasados, textos folklóricos de Guatemala y Honduras, Guatemala, 1972, pp. 154–155
k. Antonio Paredes-Candia: Cuentos populares bolivianos, La Paz, 1973, pp. 247–248

l. Ramón A. Laval: Cuentos populares en Chile, Santiago de Chile, 1928, No. II, 13, p. 237

m. Basílio de Magalhaes: O folklore no Brasil, Rio de Janeiro, 1928, No. XLVII.

〔註〕

(1) 厳密に言えば、メスティソというのは、メキシコ等では人種区分ではなく、「スペイン語で生活をする人」という文化区分である。それ故、原住民は伝統的な生活を捨て、スペイン人的生活をしようと決意した時、メスティソとなり得る。

(2) この二地域を中心に選んだ理由は、メキシコが、スペイン文化が最初に原住民の高い文化と出会った地域であること、ブラジルがポルトガル文化の代表的地域であるためである。

(3) 「ジョローナ」には本稿の「水の精」の他に、葬列に加わって、大声で泣き声をあげる「泣き女」の意味もある。

(4) Julio Vicuña Cifuentes: Mitos y supersticiones, Santiago de Chile, 1915

(5) 例えばオクタビオ・パス『孤独の迷宮』、サンチャゴ・ラミレス『メキシコ人、心理とその動機づけ』等。

〔参考文献〕（「類話の出典」および「註」に記した文献を除く。）

Félix Coluccio: Diccionario folklórico argentino, Buenos Aires, 1981

Miguel Cardona: Temas de folklore venezolano, Caracas, 1964

Elaine K. Miller: Mexican Folk Narrative from Los Angeles Area, Austin, 1973

Aurelio Llano Roza de Ampudia: Del folklore de Asturias, Oviedo, 1972

Luís da Câmara Cascudo: Contos tradicionais do Brasil, Rio de Janeiro, 1967

（みはら・ゆきひさ／関西外国語大学）